

朗読会「核無くなるまで」

原爆絵本、語り続ける岡崎弥保さん

原爆の悲惨さを描いた絵本「ひろしまのピカ」の朗読会を続ける女性がいる。俳優の岡崎弥保さんは、2015年から全国各地で多くの聴衆を前に、登場人物を演じてきた。「世界から核兵器が無くなるまで続けたい」。物語を通して被爆者の思いを伝えている。



絵本「ひろしまのピカ」を手にする俳優の岡崎弥保さん＝11月15日、東京・銀座

被爆者の思い言葉に乗せ

被爆者から受け取った思いが原動力だ。「私たちはいずれいなくなるから、語り継いで」と言われることが多かったという岡崎さん。実際に親しい被爆者が亡くなった時、言葉の重さが身に染み込んだ。「本当にいなくなってしまうんだ」

つらさを抱えたまま朗読を続けていると、ある被爆者から「『徳は孤ならず必ず隣あり』。信念を持つていれば必ず仲間ができれば」と励まされた。

「同じ志を持った人はきつとたくさんいる。歩み続けていかななくてはと思えた」と涙を拭う。

日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）へのノーベル平和賞授賞決定を素直に喜ぶ一方で、緊迫する世界情勢への危機感の表れとも感じている。「核の問題は、人類皆が当事者。これを機に平和を願う思いが集結していつかほしい」と力を込めた。

「ひろしまのピカ」は被爆の惨

状を描いた「原爆の図」で知られる画家・丸木俊の著作。東京電力

福島第一原発事故後の被災地の様子を見て核問題に関心を持ち、足を運んだ「原爆の図丸木美術館」

つに感情を込める。

ある会場に、5歳の女兒が訪れた。最初は退屈そうだったが、朗

（埼玉県東松山市）で出合った。つづられていた7歳のみいちゃん。被爆体験が実話に基づいていると知り、衝撃を受けた。

「この物語を朗読したい」。強い思いに突き動かされ、15年に同美術館で初めて上演し、これまで

イベントや小学校などで51回を重ねる。「これは実際に起きたことだと伝えたい」と、みいちゃんやお母さんに成り切って言葉一つ一

読が始まると、表情が真剣に。後に女兒の祖母から「（女兒が）毎日戦争やピカの話をするようになった」と聞き、「幼い子でも心に留めてくれたんだ」と驚いた。

生々しい被爆の描写を怖がる子もいる。だが、「丸木俊さんも『怖くない原爆はない』と悩みながらつづつたと思う。最初は怖くても、真剣に向き合って話せば受け止めてくれる」と信じている。